

# (海外最新事情)

## イギリス

### (1) 柝の実遊び禁止令

柝の実遊び (conkers) とは柝の実 (conker) に糸を通してそれを二人が互いにぶつけ合い、割れた方が負けという実に単純明快な遊びである。英国の子供たちの間で広く行なわれ、また英国の大人たちも負けじと毎年秋になると世界大会を開催したりしている。斯様にポピュラーな柝の実遊びであるが、最近になって複数の小学校がこれを禁じた。

2004年10月7日付の大衆紙『ザ・サン』によると、それは木の実アレルギー (というものがあるらしい) の子供を守るためだという。重度のアレルギーを持つ子供だと、木の実に触れるだけで症状が出るのだそうだ。湖水地方の西の外れエグレモントのブックウェル小学校では重度のアレルギーの児童が数名いるため、柝の実を校内に持ち込むことをも禁じている。スコットランドはスターリング近郊のメンストリー小学校では栄養学者の助言に従ってこれを禁止したが、校長は「子供の生命に関することでは、どんなに注意しても注意しすぎることはない」と述べている。それに対して保護者からは、「アレルギーの危険性は十分承知しているが、禁止は狂気の沙汰としか思えない」という意見がある。『サン』の記者も明らかにこれらの動きを行き過ぎと考えている。

他にも「子供を柝の実から守るための愚行」が数件報告されている。カーライルのカマーズデイル・スクールでは柝の実が眼に当たって怪我をすることを未然に防ぐために、柝の実遊びの祭にはゴーグルの着用を義務づけている。同じくカーライルのヘイトン・スクールではゴーグルに加えて、

指の怪我を防ぐための手袋の着用が校則で定められている。さらにニューカースルに近い東海岸のサウス・シールズでは、子供が登らないように街路樹の柝の枝をすべて市議会が切り落とさせたという。これに対してこの地区選出の下院議員マーティン・カラナンは「馬鹿らしくて言葉もない。これは何かのジョークか?」とコメントしている。

### (2) 結婚祝いの「ジェンダーフリー」化

近年英国では「ハグ・パーティ」(hag party) というものが頻繁に行なわれている。とは言うても老醜女 (hag) が集まるパーティではない。まずは「ヘン・パーティ」と「スタッグ・パーティ」の話から始めよう。

ヘン・パーティ (hen party) とは結婚式の前に新婦の同性の友人が新婦を祝福するために開催するもので、女だけのパーティなので「雌鳥 (hen) パーティ」と言うのである。一方のスタッグ・パーティとは当然、新郎の同性の友人が新郎を祝福する男だけのパーティである。スタッグ (stag) は「牡鹿」であるが、何故「牡鹿」と「雌鹿」(doe)、あるいは「雌鳥」と「雄鳥」(cock) という対称にならないのか、という疑問はとりあえず忘れよう。ジェニー・コルガンの小説『アマンダの結婚』には、主人公メラニーと悪友フランがアマンダの結婚相手フレイザーのスタッグ・パーティに乗り込んで行く場面があるが、これは特殊な事例であり普通は男女が混在することはない。いずれの場合もたいていは飲食店やホテルの一室を借り切って行なわれる。

そしてハグ・パーティというのは、ヘン・パーティとスタッグ・パーティを合わせたものである。2004年9月19日の『インディペンデント』による

と、最近一年半の間にハグ・パーティが急速に普及しているという。そういえば『サン』のサイトではここ数週間、ハグ・パーティの体験談を読者から募集していた。『インディペンデント』の記事では、晩婚化によって新郎新婦の友人同士のカップルが増えたことと、新郎新婦それぞれに異性の友人が増えたことをその背景と考えている。

もう一つの背景はスタッグ・パーティやヘン・パーティを禁止するホテルや飲食店が多くなったことである。男女別パーティでは酔っ払って羽目を外すことも多く、破壊行為や暴力行為に発展することも少なくない。エディンバラでは数年前にスタッグ・パーティに来た男が通りすがりの17歳の少女を強姦するという事件が起きている。10月4日付の『インディペンデント』によればイングランドの海辺の観光地にもこれらのパーティを封じる動きがあるという。特にスタッグ・パーティによる治安悪化が問題になっているからである。男女混合のハグ・パーティなら互いに異性の眼を意識するから、それほどひどい騒ぎにはならないということだろうか。(安藤 聡)

## アメリカ

### 俗化する？アメリカ英語

どうもこのところ、アメリカ英語はますます俗っぽくなっています。そしてそこには、往々にして黒人英語の特徴が垣間見られます。たとえば最近では、ブッシュ大統領が(ラッパー同士の決闘をあおる司会者よろしく)テロリストに対して“Bring it on!”(「かかってこい!」)と挑発すれば、大統領候補者のケリー上院議員も国家安全保障のディベートの場で同じ言葉を投げ返したりします。Boost Mobile社の携帯電話のコマーシャルでは、ラップにあわせて“Where you at?”(“Where are you?”のこと)が駆け巡り(<http://www.boostmobileanthem.com/>),各メディアのキャッチ・コピーはさながら黒人英語のオンパレードです。

一方で、黒人作家 James Baldwin のように、日常黒人英語 (Black Vernacular) は、かつては自己防衛の手段だったと考える人もいます。黒人が迫害された時代、白人からの想定しうる危害に対して、素早く、悟られないようにその危険を伝えるという必然性から生まれたというのです。事実、表面的な人種融合の陰で、1960年代以降、黒人はますます孤立度を深め、「モノリガル化」が進行していると指摘する黒人英語の研究者もいます。これはおもに、貧しい黒人はますます貧民街に追いやられ、自らと同じ境遇の人々とししか交流がないことと関係しています。また黒人の中にも階層化が進み、裕福な黒人と貧しい黒人とに分裂しつつあります。本来の黒人英語は疎外され、メディアに乗りやすい、若者の「クールな」黒人英語が市民権を得るという図式には、安易な解釈を超えるものがあります。

しかし、すべてを「黒人英語化」で片付けるには大きな無理があります。黒人英語は独自の口承伝統に根ざした英語の一大変種ですが、標準英語もこの1世紀の間はかなり「話しことば化」してきました。例えば、3度も大統領候補になったことのある William Bryson は、1896年に当時の金市場を批判して、“You shall not press down upon the brow of labour this crown of thorns, you shall not crucify mankind upon a cross of gold!”(「労働者の額にこの棘の冠を配するなかれ。金の十字架に人間を処すなかれ。)」という名演説を行いました。現在の演説では、このような技巧と華飾に彩られた表現はほとんど見られません。ある人たちは、1960年代の対抗文化(counter culture)がこのようなフォーマルな英語の衰退を招いたと考えています。この真偽はともかく、世界的により話しことば化が進行しているのは事実です。

特に20世紀後半から現在にかけて、「心理的な近接化」を図ることばの使い方(語用論では「ポジティブ・ポライトネス」といいます)が世界的に主流になりつつあります。つまり、人間相互の垣根を取り払って、同じレベルで語ろうとする傾

向です。話しことばの多用もこの流れのひとつといえるでしょう。また、言語学者のなかには、言語に共通する特徴に原因を求める人もいます。例えば、アメリカ英語（特に話しことば）では、もう“whom”が使われることはほとんどなくなってきました。専門的に言うと、これは「水平化」とか「ドリフト」と呼ばれる現象で、言語内部の体系的不均衡を正そうとする自然な流れなのです（“whom”を“who”に簡略化することで、他の関係代名詞と同様、格変化にとらわれずに体系的に運用できる）。しかし、他の見方から言えば「ことばの乱れ」ということになります。（『「ら」抜きことば』もこの一例です。）しかし、話しことばに収斂しているという点で、これも一種の「モノリಂಗ化」なのかもしれません。このような言語的多様性の消滅と、インターネットやメールなどにおけることばの多様性が、今後私たちの社会にどのような影響を与えるのか、大変興味深い問題です。 (片岡邦好)

## ドイツ

### ドイツとギリシア ヨーロッパの北と南で

アテネ・オリンピックの間、いったいどれほど私たちはあの白く輝く神殿を見せられたことだろう。世界遺産にも登録されている美しい神殿はまた同時に失われた文明が私たちに遺してくれた、まさに「遺産」としての廃墟なのである。最盛期の古代ギリシア、とくにアテネの絶頂期からはや2,500年もの歳月がたっている。その間を繋ぐものは何なのか、また現代のギリシアについてはどれほど知っているのだろうか。

ギリシアはその実像はともかく、長い間ヨーロッパの人々にとって憧憬の地であった。そして寒く、貧しい北の国の住民であったドイツ人はとりわけ遙かかなたの南の国、歴史と文明の源であるとされたこの地に深い憧れを抱き続けた。

しかしギリシアは長く西欧からは失われた土地だった。すでに紀元前2世紀にローマに編入され、

4世紀末にはローマ帝国の分裂を受け東ローマ帝国の領土となった。東ローマ帝国が1453年に滅ぼされると、1821年にいたるまでオスマン・トルコの支配を受けることになる。ギリシアは、ローマと違い長い間異なる文化、異なる宗教のもとにある遠い国だったのである。

18世紀の中葉になってやっと、新古典主義の流れを受けたグreek・リバイバルと呼ばれる芸術運動が起こり、ギリシアの再発見が行なわれるようになった。このとき一人のドイツ人が大きな役割を果たした。彼の名はヨーハン・ヨアヒム・ヴィンケルマンといい、貧しい靴職人の子として生まれたが苦学の末、古典文学・美術への造詣を深め、『ギリシア美術模倣論』によってギリシアの芸術の価値を広く西欧の人々に知らしめた。ヨーロッパにギリシアブームが沸き起こり、ギリシア風の建築がいたるところで見られるようになった。

だがギリシアは依然として失われた土地であった。ヴィンケルマンはギリシア美術を賛美しつつ、生涯ギリシアの地を踏むことがなかった。ゲーテはイタリアの風土と芸術に触れることによってみずからの再生を果たしたが、ギリシアに足を運ぶことはなかった。相変わらず遠い国、遙かかなたに存在する歴史の上の存在だったのである。それゆえにこそ人びとの憧れを掻き立てることもあったのだろう。ドイツではロマン主義の人たちやヘルダーリンがギリシアへの憧れを熱心に歌いあげた。

実際にギリシアがヨーロッパに復帰するのは、苦しい解放戦争を戦い抜いた1830年のことであった。この年ロンドン議定書により独立が国際的に認められ、1832年近代ギリシア王国が成立する。初代国王オソン一世は、芸術王で知られるバイエルン国王ルートヴィヒ一世の次男である。ギリシアに関する関心は大いに高まった。この頃ドイツを初めヨーロッパでは美術館設立ブームの真っ最中であり、彫刻を中心としたギリシアの美術は古典としてますますその価値を高めていった。

その一方でギリシアの現実は何となく革命が起こり、新たにデンマークの王子が

国王になるなど、国政はなかなか安定することがなかった。その後王制が廃止され共和制になり、国際連盟やアメリカの援助がかりうじて政府を支えた。

ドイツとギリシアの間での最大の不幸が、1941年から1944年までのドイツ軍による占領である。憧れの主体と対象が最も悲惨な形で一致することになった。ともに戦争で深く傷ついたが、戦後の政治はギリシアにとってより苛酷であった。連合軍による解放後、左右の対立が激化し、内乱状態が長く続いた。1967年には軍事独裁政権が成立し、多くの人々が圧政と貧困に苦しんだ。民主制が復活したのは1975年のことだった。

現在多くのドイツ人が旅行者として、気軽にギリシアを訪れる一方で、数多くのギリシア人がやむをえない事情で稼ぎ労働者としてドイツで暮らしている。かつての憧れの国について旅行者たちは何を思い、また送金を受けて暮らしている家族は旅行者たちをいったいどんな気持ちで眺めているのだろうか。 (島田 了)

## フランス

### 家族関係の法律 2 件施行

2005年1月1日に、家族関係にかかわる法律が二つ施行される。

その一つは、子どもの姓に関する法律で、両親は子どもの姓に、「子どものそれぞれを同じ姓とする限りにおいて、父親の姓、母親の姓、または両親の二つの姓を両親が選んだ順序で併置した姓」のいずれかを与えることができるようになるというものである。ただし、父親と母親の間で合意が成立しない場合は、父親の姓を与えることになる。この法律は2005年1月1日以降に生まれる子どもから適用されるが、2006年6月30日までは、すでに生まれている長子の姓に、用いられていない父母の一方の姓を付け加えることを申請できるようになっている。この場合、その姓がその父母から生まれたすべての子どもの姓となる。ただし、

2003年9月1日の日付で13歳以上の年齢に達している子どもについては、書面による同意が必要である。ちなみに、フランスでは12世紀以来、夫婦間に生まれた子どもは父親の姓を与えられてきた。800年以上にわたって続いてきた伝統がこの法律によって終焉することになる。

もう一つは、上記の法律とは直接関係ないが、離婚訴訟の簡素化と離婚調停に関する法律である。まず、離婚の約60%を占める協議離婚の場合、家庭裁判所への出頭が現行の2回から1回に軽減される。また、これまでは6年間の別居が確認されなければ認められなかった「共同生活の断絶」による離婚は、今後、「夫婦関係の決定的悪化」による離婚に取って代われ、2年間の事実上の別居があれば認められることになる。一方、有責離婚については夫婦間暴力や不倫といった「重大な状況」に限られる。これは、この部類に入る訴訟の80%は財産分配に関するいさかいによるものであるにもかかわらず、「双方向的過誤」による離婚が言い渡されてきたために制限を加えたものだというのである。

なお、フランスでの婚姻率および離婚率の推移は次のようになっている。婚姻は、1980年の33万4400件、1000人当たり6.2件から、2000年の29万7900件、1000人当たり5.1件に減少しているのに対し、離婚は、1980年の8万1200件、夫婦1000組当たり6.32件から、2000年の11万4000組、夫婦1000組当たり9.37件に増加し、2000年にはほぼ3組が結婚する一方で1組が離婚していることになる。 (田川光昭)

## 中国

### 北京の「景山現象」 中国新気功？

中国の首都北京市には毎日、国内外から大勢の観光客が訪れます。紀元前11世紀の燕の国にまでさかのぼる悠久の歴史と文化にささえられた大都市には、例えば今年の10月1日から7日まで国慶節の連休期間中に400万人もの人がやって来まし

た。北京は政治だけでなく、国際的な観光都市でもあります。

北京の観光スポットといえば、万里の長城や明の十三陵、それに故宮博物館などが有名ですが、北京っ子である私のお勧めは「景山公園」です。故宮博物館の北側にあり、公園の中心には小高い丘があります。丘の上から眺める故宮の鳥瞰図はまさに絶景。夕暮れになると、目の前に広がる故宮の屋根瓦が金色に染まります。

景山公園は交通の便が良いうえ、北京市内で最も松の木が多くて空気が新鮮だと言われています。このため、観光客だけでなく、大勢の北京市民が集まります。

最近、ここで起きている「景山現象」といわれる活動が北京の人びとに注目されています。一体、どんな活動なのでしょう。現場を訪ねてみました。

8月のある日曜日。午前9時頃でした。公園にはすでにたくさんの人たちが集まっています。“早啊，来了。”（おはよう、よく来たね）、“挺好的？”（お元気そうですね）。にこやかにあいさつを交わします。

みんな手に小さな冊子を持っています。そこには曲と歌詞が書かれており、あいさつを終えると、それぞれが歌い方を確認したりしています。そうです。公園に合唱をしに来ているのですね。

人びとは大きな輪を作ります。輪は二重、三重、四重に増え、数え切れないくらいの人々の壁ができます。並び終わると、いよいよ合唱開始。指揮者とアコーディオンの伴奏のもと、空まで届くような澄んだ声が公園中に響きます。ざっと見渡すと、その時点で200人以上もいました。1曲終わるごとに人の数は増えていき、自然といくつかのグループに分かれます。

合唱は11時半まで続きました。最後に、全員そろって“今日相聚在景山，嘹亮的歌声冲破天；要是觉得不过瘾，再等下一个星期天。”（今日，景山に集まって交歓し，高く澄んだ声は天にまで達した。もし満足できなかったら，また次の日曜日に会いましょう）と歓声をあげ、握手しながら分か

れを告げました。

参加者の多くは退職した50代から80代の人たちです。サラリーマンや公務員だった人もいれば、軍の高級幹部など地位の高かった人もいます。でも、歌う時は肩書を忘れて、互いに「歌友」と呼び合います。歌っている曲は1940～60年代の懐かしくて明るい歌が多く、みんな自分の若い頃のことを思い出しながら、幸せそうに歌っていました。

66歳の張さんは「カラオケの店に行くと部屋は狭いし空気が悪く、お金もかかる。ここなら何百人、何千人と一緒にマイナスイオンの多い松の木の下で歌えるので、精神的にも健康的にも最高だ」と話していました。隣にいた60歳の李さんは「その通り。みんなで一緒に元気に年を取るんだよ。ここに来れば、みな友人だ」と笑い、76歳の陳さんは「わたしは20年間、喘息で何回も発病したが、5年前から毎週土日にここで歌うようになり、症状はだいぶ軽くなった。新しい気功みたいなもんだね」とうれしそうです。

現在、中国では景山公園のような中高年の合唱団が各地で続々と誕生しています。公園は高齢者の社交の場というわけです。もっとも、高齢化社会が始まりつつある中国では、老後を豊かに過ごすために、公園以外の交流の場も作らなければならないでしょう。急速に変わっていく中国には、取り組むべき課題が山ほどあります。

（鄭 高咏）

## 韓国

### KTX，国内航空旅客を奪う

今年（2004年）4月1日に韓国的高速鉄道KTX（Korea Train Expressの略）が開通した。路線は京釜線と湖南線の二つで、前者はソウルと釜山を2時間40分で、後者はソウルと木浦を2時間58分で結んでいる。従来の特急セマウル号の場合、ソウル・釜山間が4時間10分、ソウル・木浦間が4時間42分であるから、大幅な時間短縮が実現したわけである。当然のことながら、国内航空

便の利用客数に影響が出ることは当初から予想されていたことであるが、10月17日に韓国の聯合ニュースが報道した記事によってその大きさが明らかになった。

その記事は、韓国空港公社が国会建設交通委員会の委員に提出した国政監査資料の内容を紹介したものである。それによると、KTX 開通後の4月から7月までの4ヶ月間で、ソウルの金浦空港発釜山、大邱、光州行き航空旅客数は昨年同期に比べて24%減の282万3838人で、運行便数も20%減の2万1503便であった。済州路線のようなKTXの影響を受けない路線では旅客数の増加が見られるので、国内線全体では旅客数が1270万7364人で、昨年同期に比べて11%の減少であるとのことである。ちなみに、地方空港の国際線の場合、1998年以降昨年までの5年間で、輸送実績が年平均12.3%増加するなど持続的な成長を見せ、今年は今末までに37路線で260万人の乗客が利用すると推定されている。また韓国空港公社は、金海（釜山）と済州、光州を除いた金浦など11空港が赤字になると予想しているとのことである。

ところで、KTXのホームページ (<http://ktx.korail.go.kr/>) によると、1996年から次世代高速電車G7が開発されている。これは現在のKTXよりも50km速い時速350kmの最高速度をもつもので、試験運行と安定化の期間を経て2007年から京釜線と湖南線に投入する予定であるとのことである。このG7は「韓国型」と形容されており、フランスの高速電車TGV (Train de Grande Vitesseの略)を導入したKTXとは異なり、韓国が独自に開発したものと思われる。ともかく、このG7が投入されれば、韓国の国内航空便はますます打撃を受けることになるであろう。

(田川光照)

#### 編集後記

「語研ニュース」第12号をお届けします。今回は、取り上げられている国・地域が中国、韓国、サイパン、メキシコ、スペイン、アメリカ、イギリス、ドイツ、フランスと久々に広範囲なものになりました。その内容も旅行記から時事的なものまで多彩で、楽しく読めるものになったと思います。

ところで、名古屋語学教育研究室が行っている学生向け事業として、この「語研ニュース」発行のほかに、外国語検定奨励金制度の実施や外国語コンテストの開催などがあります。これらについて詳しくは当研究室のホームページをご覧ください。(M.T.)